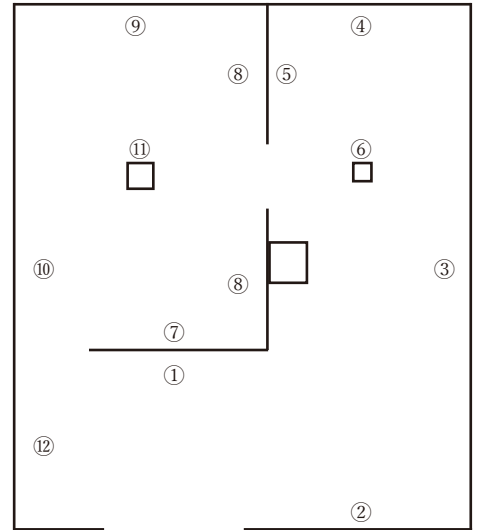


## List

Takeshi Mita

公益財団法人東急財団 主催  
五島記念文化賞 美術新人賞 研修帰国記念  
三田健志個展「忘れていい風景」

会 期 | 2023年12月19日(火)~2024年1月7日(日)  
休館日 | 12月25日および年末年始 (12/29~12/3)  
時 間 | 10:00~17:00 (展示室入場は16:30まで)  
最終日は15時まで (展示室入場は14:30まで)  
会 場 | 茅ヶ崎市美術館 展示室 2・3  
観覧料 | 無料  
主 催 | 公益財団法人東急財団  
協 力 | 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団、  
ハワイ大学マノア校 美術・美術史学部、(株)ハワイ報知社、  
キャノン株式会社、株式会社ジェイ・エフ・ジー



展示室2 作品 ①-⑫  
展示室3 作品 ⑬

## 主な展示作品リスト

※作品の構成・配置は変更されている場合があります

### ①②③④⑤⑦ 〈PortLait〉 2022 - 2023年, Digital Pigment Print, 1360×960 mmほか サイズ可変

ハワイに暮らす人々の「眼差し」をモチーフとした作品です。三田が現地で交流した人々の後ろ姿がおおむね等身大でプリントされています。写真の傍にはキャプション(説明文)の代わりに、モデルが大切にしている私物を写した写真と短いテキストが添えられています。綴りに誤り(Port"l'ait)がある作品タイトルは、ハワイならではの特殊な言語環境と三田の語学力の不足を反映したものであり、作中に様々な誤りが含まれていることが示唆されています。

### ⑥ 《List》 正誤表(日本語版)》 2023年, テキスト、画像, 287×200 mm

展覧会に合わせて出版された写真集《PortLait/Filler》の正誤表と本展覧会の作品リストがあわせて製本されています。

### ⑧⑨⑩ 〈Filler〉/〈PortLait〉 2022 - 2023年, Digital Pigment Print, 1000×1500 mm, 385×585 mmほか サイズ可変

Filler(フィラー)はハワイ諸島各地で撮影した風景をまとめたシリーズです。本展では、動物園や植物園など人の手で作られ、管理されている場所を写した作品を中心に展示しています。管理されているとはいえ、とりわけハワイ島におけるそれは非常に緩やかで、園外からやって来た動物が壊れたケージの中で自発的に展示物として暮らしていたり、外来植物が展示植物に寄生して支配されていたりと、内と外の境界はしばしば曖昧になっています。タイトルのFiller(フィラー)とは、「えーっと」「あの」など、それ自体はほとんど意味を持たないつなぎ言葉、言い淀みを指す言葉です。辻褄の合わない前後の発言を強引に接続したり、ためらいの気持ちや発言とは反対の真意をほのめかすなど、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たすものですが、インタビューの書き起こしのような文献にその効果が残ることは少ないようです。

### ⑪ 《Manoa/Hiroshima》 2023年, 水石(滝石) コンクリート、樹脂、絵葉書ほか, 190×110×110 mm (制作協力: 構想計画所)

研修の最初の本拠地であったオアフ島マノアには緑深い山々が連なっており、その様子が三田の故郷である広島に似ていたことに思いがけず心が励まされたと三田は述べます。かつて日本からハワイへ移民として渡った人々は、皆それぞれ故郷への思いをこめた特別な物をお守りとして携えていました。時を経て行き場を失ったそれら移民に由来する物が、ハワイの資料館や古道具屋ではよく売られています。作品に使用されている水石は、小さな石に大きな自然を見立てる文化に由来するもので、明治から昭和期の絵葉書(広島の滝)とともに古道具屋で三田が入手したものです。これらが本当に移民が故郷を想うためのお守りであったのか確かめる術はありませんが、この作品には、研修初期の三田の素朴な体験と研修中に幾度も訪ねたハワイ各地の滝の面影が投影されています。

### ⑫ 《History (S/P/F)》 2022年, 700×500 mm、《History (Fir)》 2023年, 1500×1000 mm 2点ともに Digital Pigment Print、SPF材

作品を保護している額縁は、それぞれの写真に写されている木—SPF材などで制作されています。SPFとはSpruce(スプルース:トウヒ)、Pine(パイン:松)、Fir(ファー:もみ)の3つの樹種の総称で、木材の名称はそれぞれの頭文字から取られています。柔らかく加工が容易であり、用途もほぼ共通することから、それぞれの木材の出自の違いは意識されることなく広く流通し、DIYにもよく用いられています。

### ⑬ 展示室3 《Telephone & Facsimile》 2023年, 映像、2スクリーン (制作協力: 構想計画所)

立体物を粘土で模刻する様子が2つの画面に投影されています。うつし取ること、情報を伝達することなどをモチーフとしています。

PortLait/Filler  
正誤表 (日本語版)

## 《正誤表（日本語版）》について

《正誤表（日本語版）》（以下、本冊子）は《PortLait/Filler》の付録作品です。本冊子は《PortLait/Filler》に掲載した写真と、写真の隣に添えられた文章の組み合わせの不一致を告白することを目的としています。そのため、作中の文章やクレジットの誤りを訂正するような正誤表本来の機能は果たしません。

《PortLait/Filler》および本冊子に掲載した文章の原文は、日本語または英語で書かれています。原文が日本語の場合は誤字、脱字を含め原則原文のまま掲載しています。原文が英語の場合も明らかな誤記も含め、原則修正しないまま翻訳して掲載しています。この文章自体を含め、翻訳にあたっては機械翻訳を使用しているため多くの誤りがあります。また、極端な意訳も含まれています。

## 《PortLait/Filler》について

被写体となった方々には、作品について文章と口頭で説明を行い、ご協力をいただきました。説明においては誤解なく伝わるよう最大限努めました。が、作者の説明能力や言語能力の不足によって、内容を正確に理解していただけていない可能性があります。文中に問題があった場合、その責は《PortLait/Filler》および《正誤表（日本語版）》の作者である三田健志にあります。

具体的な依頼内容にかかわる部分についての説明文（省略版）を以下に掲載します。

### 説明（省略版）

以下の①-③についてご協力をお願いいたします。

#### ① ポートレートの撮影

あなたと関係が深い場所、またはあなたの好きな場所を教えてください。その場所を背景にしてあなたの後ろ姿を撮影します。顔は写りません。服装は普段着のままでもかまいませんが、あなたらしさを表す服装をお持ちであれば、それを着てもらえると嬉しいです。

#### ② あなたの私物の撮影

あなたの人生と関係の深いアイテム、またはあなたとハワイの関係を表す大切なアイテムの一つ撮影させてください。

#### ③ 文章の執筆

以下の4つの質問に文章でお答えください。1)と2)はあなたについての質問です。3)と4)についてはあなたに数枚の写真を見てもらった上でお答えいただきたい質問です。難しくれば未記入でもかまいません。書き方や文字数は自由です。1)と2)については以下に例をあげました。目安としてお考え下さい。



サンプルイメージ（人物）



サンプルイメージ（私物）

#### 1) ルーツや仕事、ハワイとのつながりなど、あなたの人生について教えてください

例) 私は1950年に日本の広島で生まれました。先祖がハワイに移民として渡ったという話を祖母から聞いて、子供の頃からハワイに興味をもっていました。実際にハワイを訪れたのはずっと後のことです。小さいころから物を作ることが好きで、大学では版画を学びました。卒業した後は色々な縁があって10年ほどハワイの博物館で働き、日本の文化を紹介する展示をいくつか企画しました。そのあとハワイ大学で美術を教えて二年前に引退しました。今は趣味で写真を撮りながら、妻と二匹の猫と一緒に気ままに暮らしています。

#### 2) 選んだアイテムについて、あなたとの関わりを教えてください

例) これは祖父が撮影した写真です。祖父の葬儀の時に形見として貰ったカメラと一緒に未現像のフィルムが残っていました。それを現像したものです。フィルムはほとんどダメになっていましたが、数枚にだけイメージを見つけることができました。そこにはハワイと祖父の姿が写っていました。祖父がハワイに行ったことがあるなんて家族の誰も知りませんでした。その当時、私は大学勤めをやめたばかりで時間とお金に少しだけ余裕がありました。それで祖父の写真を頼りにハワイを訪ねることにして、それから思いもかけずこちらで長く暮らすことになりました。当時は随分大変な思いもしましたが、今となっては懐かしい思い出です。

#### 3) 他の協力者の後ろ姿を撮影した写真から、好きな一枚を選んでください。その人がどのような人物なのか自由に想像してください。ルーツや仕事、ハワイとのつながりなど、その人の人生について写真に写っている人物になりきって紹介してください。

#### 4) あなたに一枚の写真を見せます。これは3)の人物の私物で、彼/彼女の人生に深い関係があります。このアイテムを持ち主としてどのようなものなのか想像してください。そしてこのアイテムの持ち主になりきって、アイテムについて紹介してください。



凡例

《①/②》 ①:「写真」に写っている人物の名前 ②:「写真」を見てテキストを書いた人物の名前

- 1) ①の人物が自分自身について書いた文章
- 2) ①の人物が私物について書いた文章
- 3) ②の人物が「①の人物の写真」を見て創作した文章
- 4) ②の人物が「①の私物の写真」を見て創作した文章

※《Jacob/Mary》の場合

- 1) JacobがJacob自身について書いた文章
- 2) JacobがJacobの私物について書いた文章
- 3) MaryがJacobの写真を見て書いた文章
- 4) MaryがJacobの私物の写真を見て書いた文章

(誤) 配置画像の誤り



(正) Lonny



《Lonny/Taro》

- 1) 本人による文章なし
- 2) 本人による文章なし
- 3) (TaroがLonnyの写真(正)を見て創作した文章)

私はヒロに住む大工で、日系4世です。主に店舗の内装工事を手掛けています。大工の仕事は祖父の代から続いています。私が小さかった頃はいつも祖父と父が作業をしている時にそばにくっついて見ていたので、子供のころの夢は大工でしたし、働くときには大工以外の仕事は考えられませんでした。まだ、大工になってまだ日が浅いですが、自分の仕事が楽しくて仕方ありませんし、いつか祖父や父を追い越せるようになりたいと思っています。

- 4) (TaroがLonnyの私物の写真を見て創作した文章)

これは祖父の代から引き継がれている墨壺とノミです。今でも作業をする時に使っています。これを使いながら仕事をしていると、私が小さかった頃に見ていた祖父や父が仕事をしている姿を思い出します。これがなければいい仕事はできませんし、これを使うことによって自分の仕事に誇りを持てます。私にとってなくてはならない宝物です。

《Charles》

- 1) 本人による文章なし
- 2) 本人による文章なし
- 3) (Charlesが左の人物[匿名]の写真を見て創作した話の書き起こし)

私とハワイの関わりはこの植物園に凝縮されています。今は仕事として管理に携わっているわけではありませんが、毎日散歩に来ています。ここは小さな地図であり、私たちのものとは異なる言語で島の歴史を記述するテキストです。

ここにはあらゆる植物がありますが、実際のところ、多くの人がハワイらしさを感じる植物のほとんどは外来種です。ずっと昔、ポリネシアの人々が運んできたものを除けば、多くの動植物が移民政策にともなって各国から持ち込まれたものです。たとえばあなたが街で見かけたハイビスカスも、きっと中国から持ち込まれた品種と掛け合わされたものだったでしょう。プルメリアもヨーロッパから植物学者が持ち込んだものだとされています。日系人も多くの植物を栽培し、ハワイに広めました。固有の種はほとんど絶滅しかけています。私はそれを非難したわけではないのです。文化や習慣と同じように、親しみのある植物は移民にとって欠かせないものでした。それらはハワイと故郷との隔たりを埋めて彼らの心を慰め、それと同時に故郷の、あるいはハワイのかつての姿を忘れさせていきました。それらが今のハワイ、すなわち彼らの子ども達の故郷の風景を形作っています。





#### 4) (Charlesが左の植物の写真を見て創作した話の書き起こし)

ここは私にとって特別な場所です。創設者のダン・ラトケンハウス・シニアは、1977年にハワイ島への休暇中にオノメア溪谷を発見しました。ダンは土地の探索を開始すると、溪谷とその美しさを永遠に保存するために植物園を設立することを決意しました。オノメア溪谷はかつて、外来種、雑草、茨の茂みが生い茂り、事実上侵入不可能なジャングルでした。

1984年に庭園がオープンするまで、ダンとアシスタントのテリー・タイクエは毎日、週7日、サトウキビナイフ、鎌、つるはし、シャベル、チェーンソーを使ってジャングルの道を切り開いていきました。妻のポーリンがダンに茶色のランチバッグを用意すると、ダンはジャングルに姿を消し、夜になると汚れてたくたになって帰ってきました。



#### 《Sakura/Micah》

1) 私は1976年に鳥取県米子市の助産院で産まれました。私の家族は、海寄りの皆生温泉のある地域に暮らしていましたが、週末は大山という山のある伯耆町大倉という村の、先祖から代々受け継いだ古民家に通い、山や畑、家の手入れをしながら湧き水を飲んで週末を過ごすという暮らしをしています。私は20年ほど東京で商業デザイナーの仕事をしており、30代にかかる頃に仕事でハワイへ渡ることになりました。30代の後半にきて子宮頸癌を発症し、離婚もし、地元米子市に戻り自然治癒力を高める治療法を実践した暮らしを続けているうちに、癌を自己治癒しました。今はオアフ島マノアで再婚し、40代で子宝にも恵まれ、マノアバレーの真ん中にある森の中に暮らしています。そこで自己治癒のご指導や心の花療法をおこなっています。

2) これは胡蝶蘭の花です。ハワイの気候は蘭を育てるのにとっても適していて、私もいつの間にか自分で買ったり、人からいただいた苗を育てるようになって、今では義理の母と苗を交換しあって楽しんでいます。私の祖母も母も、叔母たちも花が好きでした。山の家も四季折々の花で溢れかえっていましたが、そういえば家の中は蘭の花だらけでした。40代にして私は母になり、ハワイで暮らすようになった今、自分が育てている蘭を見ていて、あることに気がつきました。子供の頃にテレビを見ていると、いつも蘭の葉っぱがテレビの画面にかかっている、とても鬱陶しく感じたものです。母は「ほら、咲いたよ！いい香りでしょう？蜜も沢山出ている！」と、嬉しそうに見せてくる。あ、そうか、お母さんは私の視界の中を花で満たしたかったんだ！ということ。そしてそれを素直には伝えられない、そんな彼女の性格にも、遠く離れた太平洋の真ん中で気づかされました…。日本であれだけ蘭を育てるのは、大変なこと。すごいなあ。私も娘の視界を色とりどりの花で満たしたい、と思っています。



3) 私は1980年代にハワイのヒロで生まれましたが、カポホにある実家の蘭農園で育ちました。私のルーツはプランテーション時代に遡り、先祖はアジア各地からやってきました。熱帯雨林や潮だまりを探検して育ち、いつも自然の力に魅了されていました。ハワイ大学に通うために家を出て、家業であるフラワービジネスの経営を学び、学位を取得しました。私は蘭農家の3代目で、自然の中で花に囲まれることほど好きなことはありません。2018年の溶岩流は私の家族の種苗場に壊滅的な打撃を与えましたが、幸いにもすべての蘭を破壊されることはありませんでした。復旧には時間がかかり大変でしたが、種苗場が大幅に小さくなったので、自然の中で、また種苗場の中で幼子と過ごす時間を増やすようにしています。

4) プランテーションから出た後、私の祖父母は蘭の栽培と販売を始めました。両親が事業を引き継いで拡大し、今度は私が家族経営の果樹園を経営する番になりました。蘭に囲まれて育ったので、蘭にはうんざりしていると思われるかもしれませんが、でも本当に私は蘭が大好きなのです。特にこの白い蘭がお気に入りです。これは祖母の好きな品種で、家に遊びに行くといつも咲いていました。自分の結婚式の飾りにも使いましたし、家にも置いてあります。咲いている蘭を見るたび、祖母のことやなぜ私が蘭を育て続けるのかを思い出します。

#### 《John/Sakura》

1) 私は1964年にニュージャージー州で生まれ、ごく普通の子供時代を過ごしました。大学を卒業した後、どのような道に進むべきかわからず、旅することにしました。そして結局2年の間、日本で英語教師として働くことになりました。その間、私は日本語を勉強し、多くの時間をかけてお寺や博物館を巡りました。そして日本の美術を学び、教えることが私の生涯の仕事になるのだと確信しました。大学院に通うためにアメリカに戻り、京都で活動した日本人近代画家の専門家になりました。15年前にハワイ大学マノア校の職を得てハワイに移り、それ以来ここで暮らしながら教えています。

2) これは『京都に於ける日本画史』という本です。1929年に有名な芸術記者によって書かれたもので、私の研究にとってかけがえのない貴重な資料です。京都大学の博士課程で研究をしているときに手に入れました。京都に到着して間もなく、私は芸術書専門の古書店に出会いました。店に入って店主とおしゃべりをし、1910年代の





京都の絵画を研究するためにここにいるのだと言うと、彼はこの本を取り出して手渡してくれました。貴重な情報にあふれていましたが、それはたいへん希少で非常に高価なものでした。私は買う余裕がないと店主に伝えましたが、絶対に必要なものだからとにかく持っていきなさいと彼は言ってくれました。私はお金があればいつでも彼に支払うようにしました。それ以来、この本はずっと私と共にあります。これは重要な資料であるだけでなく（今でも私が持っている他のどの本よりも参照しています）、顔見知りでもない若い留学生への、店主の温かいはからいを思い出させてくれるものでもあります。少しずつでしたが、その借りをようやく彼にお返しすることができました。

3) 私は1958年に軍人だったアメリカ人の父と、京都出身の日本人の母の間にオアフ島で生まれ育ちました。子供の頃の夏休みには京都に住む祖父母の家を訪れ、京都文化を体験するというとても貴重な経験をしました。

私の職業は日本画家で、現在はハワイ大学マノア校で日本美術史の講師としても仕事をしています。子供の頃に経験した京都での体験や景色は、いまでも自分の暮らしの中に活かされていますが、四季折々の日本文化と繊細な色彩美をアメリカ文化の中で育った人たちに伝えるのはとても難しいことだと感じる日々です。感性は環境で育つ、そういったことを考えさせられます。

4) この本は、私が昔ヒロを訪れた際に古道具屋で見つけたものです。日系の方が残した貴重なもので、京都東山の四季と文化を伝えている珍しい本です。仕事の傍に常に置いているお守りのような本です。とても古い日本語で書かれているので、読み解くのにかかっていますが、ゆっくりと紐解いていくのも面白いものです。

### 《Glenn/John》



1) 私は1954年にオアフ島のノースショアで生まれました。両親はハワイ生まれの二世、祖父母は一世で、二人とも沖縄からの移民でした。ハワイで育った頃はのどかでした…。たとえ裕福ではなかったとしても、幸せて素晴らしい子供時代でした。ハワイには文化の調和があります。あらゆる人種が共存し、争いや差別もなく仲良く暮らしています。私の親友はフィリピン人とハワイ人でした。

両親は私たちを「アメリカ人」にしたかったので、家庭では英語は話しましたが、日本語は少しだけでした。私が知っていた日本語の単語は、「バカタレ」「ウルサイ」「エライ」「ベンジョ」などだけでした。日本語を学んだのは大学時代と日本の文部省の助成金で日本にいた時だけでした。私は幸運にも京都に住んでいて、インスピレーションの源となった有名な庭園や寺院を体験することができました。アーティストとして、私は自分の方向性、スタイル、ソースを日本に見出しました…。自分の文化的背景との再接続です。私はこの日本とのつながりと、ハワイとアメリカでの育ちを自己表現に活かしました。画家として主に、海、山、空、そしてハワイの岩や火山、溶岩、波などの自然からインスピレーションを得て抽象画を制作しています。

日本では木版画を学び、現在はハワイで多くの人々を教えています。私は素材とプロセスの自然さを愛しています。絵画と同じアイデアを、非具象的なイメージや実験的な手法を通じて表現しようとしています。「侘び寂び」と「渋い」という概念が作品に込められています。



2) 木版画は特殊な手技です。制作プロセス、材料、ツールは非常にシンプルかつ基本的です。私は天然素材とのつながりと、毒性のない要素の使用が大好きです。ノミやナイフの使用は快適で、バレンは独創的な発明です。非常にシンプルなコンセプトで、重い金属製のプレス機の必要性がなくなり、プレス機をポケットに入れて持ち運ぶことができます。抽象画家として、木版画を通して新しくユニークなテクスチャーとレイヤーを作成する方法を常に模索しています。これが私に銅線、釣り糸、その他の非伝統的な素材からバレンを作る実験に導きました。また、さまざまな工具、家庭用品、工業用品を使用して、版木にマークやカットを入れる新しい方法を考案しています。私は常に、珍しくて独創的なイメージを追求しています。

3) 私は40歳です。カリフォルニアで日系人の両親のもとに生まれました。私は大学で美術を専攻しており、学生時代に日本に1年間留学して、そこで日本の木版画に大変興味を持ちました。留学プログラムのもうひとりの学生はハワイ島出身で、卒業後は彼女と一緒に過ごすためにヒロに引っ越しました。私たちは結婚し、数年間造園の仕事をしたあと大学院に進み、ハワイ大学ヒロ校で造園学の学位を取得しました。現在はガーデンデザイナーとして働いています。時間がある時は作品制作に取り組んでいて、自分で版木を彫ったり、伝統的な日本風の木版画を刷ったりするを楽しんでいます。

4) 写真は私の版画工房で撮ったものです。日本の伝統的な木版画を制作するために使っている道具です。大学時代の版画の先生が卒業記念にくれたもので、私にとってとても貴重なものです。ノミ、刷毛、水滴は日本への留学中に手に入れました。



### 《Wipio》

1) (Wipioが語った話の書き起こし)

—随分長くここにいらしゃいますね？私も二時間くらい前からここにいます。

作品を撮っているのですか。いい場所を選んだと思います。

いえ。本土に住んでいます。先日息子が大学を卒業したのですが、それでお祝いのためにハワイ島に遊びに来ています。

ありがとう。息子は家にいます。今日はひとりで娘に会いにここに来ました。

ええ。今もここにいます。この場所に来ると娘が確かにここにいるということがわかるのです。

悲しい顔をしないでください。もうずっと前のことです。

ところで、私の写真も撮っておきますか？

2) —娘に届けるために全部海に流してしまいました。そういうわけで、今は何も持っていません。いいですよ。隣の宿に荷物が置いてあります。戻れば何かあるかもしれません。一度戻って、それから一緒に食事をしましょう。

3) 他の人物によるテキストなし

4) 他の人物によるテキストなし

(誤)



(正)

### 《Casey》

1) 父はいつも、私たちはエジプトのファラオの末裔だと言っていましたが、その話はやめておきましょう。子どもの頃、私は川に漂い道教を受け入れました。大人になってからは、物理学者とエンジニアになるために古典的な訓練を受け、紙飛行機を作って生計を立てていました。私は人生最愛の人、ジュリーと出会って3日後に結婚し、その後ハワイに逃避して、マテリアリズムのかわりにアロハの精神の内でもミナを育てました。私たちは、太平洋に漂う世界の2つの大きな山の間、破壊の川であるワイルク川のほとりに暮らしています。大きな変化の時代に他者に調和を教えながら。

2) ジュリーが砂浜で見つけた海からの贈り物です。私が年を重ねるたび、家族は貝殻を集めました。砂浜に出かけたり貝殻を探したりするのは、家族にとって特別な時間でした。貝殻には記憶と生命が宿っています。貝殻を手にする時、私たちは海や風の音だけでなく、それを家へと成長させた最初の生命の記憶と、長い時の中でそれに触れたあらゆる生命の記憶を共有することになるのです。

3) 他の人物によるテキストなし

4) 他の人物によるテキストなし

### 《Arnold/Casey》

1) 私の名前はアーノルド・ヒウラです。1951年にハワイのヒロで生まれ、ヒロから約5マイル北に位置する砂糖プランテーションの町パパイコウで育ちました。私が育った時代は、プランテーションの町がハワイ諸島のいたるところに点在していました。そういった小さな町を中心に生活は営まれていて、どの町にも製糖工場、学校、体育館、雑貨店、野球場、理髪店、さまざまな宗教の教会などがありました。

学校に通い、さまざまな背景を持つ子供たちと一緒に育ちました。ハワイアン、中国人、フィリピン人、ポルトガル人、韓国人、プエルトリコ人、白人と並び、日本人はしばしば最大の民族グループとなっていました。家族にさまざまな民族の血が混ざっていることは、当たり前のことでした。

地元の小中学校に通った後、ヒロ高校に通い、最終的にハワイ大学マノア校で英文学を専攻しました。その後、シアトルのワシントン大学で英語の修士号を取得しました。

英語教師、フリーライター、マーケティングコンサルタント、ニュース編集者、博物館学芸員など、さまざまな仕事をしてきました。大人になってからの人生の大半をオアフ島で過ごし、昨年100歳で亡くなった母の近くに住

むため、約11年前に妻とハワイ島に移り住んできました。私にとっての人生の旅路は一周回って、私のルーツである故郷に戻ってきました。

私が着ているシャツは、「バラカ」と呼ばれる生地で作られたものです。砂糖生産の全盛期に作業服を縫うために使われてきた格子状の織物です。今日ではプランテーションの伝統から生まれた地元文化の象徴としてよく使用されています。







2) さまざまな民族のプランテーション労働者がよく使っていた金属製のランチペールです。カウカウ缶、bento缶、bento bakkoなどと呼ばれていました。これは私の父方の祖母、ササノ・ヒロタのものでした。彼女は日本で生まれ、後に広島から移住した両親と合流しました。ササノは福岡から移住したヒロタ・タツキと結婚しました。彼らは2人の男の子と4人の女の子を育てました。家族はハワイ島パパイコウのマハルアに住んでいました。このお弁当箱は幼い頃の思い出の品で、学生時代に夏休みにサトウキビ農園に働きに行くときも、自分のお昼を持っていくのに使っていました。

下の大きな部分には炊き上がったご飯が詰められ、上の小さな部分にはokazuが入っていました。サトウキビ畑で昼休みになると、労働者たちは手を止めて、その日一緒に働いていた人たちと車座になりました。彼らはご飯を手に持ち、okazuがのった皿を皆の輪の中央に置きました。みんなでお互いのokazuを分け合うのが習慣だったのです。

3) 私はハワイ大学の歴史学部で働いています。父はスコットランド系でホノルル出身、母はオハイオ州出身です。私は70年代後半にカリフォルニアの大学に進学しましたが、現代のアメリカに不満を持つようになり、再びシンプルな生活を求めてハワイに戻りました。ここで暮らすのは大変になってきましたが、私はアロハ・スピリットを受け入れています。私はハワイの過去の記憶を保存する使命があると感じています。人々は少ない資源で生き残るために、地域社会を受け入れました。昔のハワイの教訓は、引き裂かれつつある現代の世界にも役立つはずで、私とハワイの結びつきはもう25年にもなりますが、子供たちは大きくなって独立し、本土で暮らしています。

4) この鍋と椅子は、メキシコ系ハワイアンのカウボーイたちのものです。彼らは牧畜業を立ち上げ、維持するためにこの島にやってきました。遠く離れた土地で新しい生活を始める——砂糖プランテーションで働くためにこの島にやってきた日本人の家族のものである可能性もあります。そうでなければ、ハワイに溶け込んでいる他の十数カ国の移民の家族のもので、この鍋は、ハワイがいかにミックスプレート文化——文化的多様性をもっているかを表しています。食べ物を作って分け合うことでハワイ島にまったく新しい文化が生まれ、皆が団結することができました。12の文化が融合することで、新しい何かが生まれたのです。

これらは1930年のもので、鍋は島の人々の過酷な生活を表しています。アメリカの人々は冷蔵庫や現代の便利な生活に慣れていましたが、ハワイの状況はまだ昔ながらのものでした。ごくありふれたものであっても、自分の道具を尊重し大切に扱いました。ここに物を輸送するにはとてもお金がかかるからです。

ハワイでの生活は、過去のタイムカプセルの中に住んでいるようなものです。私たちは時代に乗り遅れていますが、それは同時に、これから訪れる新たな時代の荒廃から私たちを守ってくれます。

### 《Vince》



1) 1975年に東京で生まれました。父は工業デザイナー、母は書道家、そして9つ離れたインテリアデザイナーの姉がいます。常に考えを広く持ち、新しいものや、海外など外の世界にも目を向けさせてくれるその当時には珍しい革新的な家族だったと思います。自分自身も子供の頃から日本を離れたい意思が強く、10代半ばで単身ハワイに来ました。大学や仕事でアメリカ本土にも10数年住みましたが、自分のルーツを考え出す20代後半にハワイに戻りました。

今は大学で教えています。学生時代は、教育、政策、社会福祉、先住民族について学び、その縁から、ハワイアンやローカル日系、沖縄の方々の文化や伝統に携わらせていただく機会も多く、様々なプロジェクトに関わらせてもらっています。自分の役割として、ハワイと日本をつなげる橋渡しにパッションを感じています。

かつてはハワイ生まれ・育ちではなく、日本からきた日本人なのに、ハワイでのこと、ハワイアンの人たちが行う活動に関わらせてもらったり、参加させてもらうことに戸惑いも感じていました。自分のアイデンティティについて多く考えることもありましたが。ただ、型に当てはめるのではなく、今いる場所、今やっていること、今一緒に物事を進められている人たちとの間に、自分自身のルーツやアイデンティティがあるのだとこの数年で思えるようになってきました。



2) ハワイアンの主食であったタロ（カロ）は、彼らの直接の先祖であり、とても大切に扱われ育てられています。Hā（息をすると言う意味ももつ）と呼ばれるその茎は、神の子の首そのものであり、収穫の際にもそこを持って引き抜くことは決してありません。

私はこのタロイモ畑に日本からの学生やゲストをよく連れてきて、ハワイアンの学生がツアーをしてくれるプログラムで通訳をしています。畑の構造や、カロ自体から、人生に必要な多くのコンセプトや要素を学ぶことができ、関わることで自分が自分自身のルーツを考えさせてくれるきっかけとなります。自分も例外ではありませんでした。よくハワイアンの方々から、「人は誰しもどこかの場所の先住民である(we are all indigenous to somewhere)」と教えてもらいます。日本から来た日本人でありながら、ハワイに長く滞在させてもらい、自分自身の存在意義、Kuleana（クリアナー人生をかけて務める義務や責任）を耕し続け、この地でHā—息を感じさせてもらっています。

3) 他の人物によるテキストなし

4) 他の人物によるテキストなし

### 《Virginia/Vince》

1) 本人による文章なし

2) 本人による文章なし

3) 50代で、ハワイアンと日系の血が少し入っています。ハワイ島で生まれ育ちました。旦那と子供と暮らしています。趣味は料理とカヌーと、子供の成長を見ることです。ヒロに家族が多く、家族との時間をとても大切にしています。現在、水族館で教育担当として勤務しています。ハワイの自然の雄大さやストーリーの多さを共有し、次世代に学びの場を提供していくことに意義を感じ、プログラム内容にクリエイティブさを常に求めています。ハワイにいる海洋生物の保護や、それらにまつわるストーリー、ハワイに関する神話に興味があります。今は、環境汚染についてとても心配し、自分が生まれ育ったヒロの変化にも少し不安を覚えています。教育プログラムを通してアウトリーチの取り組みを進めています。

4) 自分の家族の守神でもあるタコのストーリーを多く聞いて育ちました。今、仕事でハワイ近海・諸島の海洋生物保護に関わる仕事をして、自分の先代との繋がりもそこに感じています。充実した仕事としてのシンボルでもあり、自分のルーツ探しのシンボルになった写真です。

### 《Bonnie/Hayashi》

1) 私は1950年に二世の両親の第一子としてホノルルで生まれました。幼い頃から三世代家族で暮らしてきました。最初は祖父が建てたプランテーションの家でした。私が4歳か5歳のときには、家族全員で1930年代に建てられたプランテーション管理者の家に引っ越ししました。やがて家族が増え、今では3人の弟妹、両親、祖父母、2人の叔母がいます。

私たちの両親と叔母が働いている間、祖父母がベビーシッターをしてくれました。祖父母は日本語、しかもとくば、片言の英語、そしてさまざまな民族の言葉やハワイ語さえも組み合わせた典型的なプランテーション言語を組み合わせ話していました。祖父母はよく沖縄の話をしてくれました。それはいつも、大変魅力的に聞こえました。祖母は常に沖縄についてできることは何でも学ぶように勧めてくれました。彼女は、たとえ私が伝えられたことすべてを理解することができなかったとしても、いつか沖縄とその人々、そして遠く離れたこの特別な場所についての物語の価値を理解し、感謝する日が来ると信じていました。

祖父母や両親にとって教育は非常に重要でした。それで私は、彼らの励ましと支援を受けてハワイ大学で教育を受けることができました。さらに母は、私の沖縄の伝統芸術への関心を盛り立ててくれて、ハワイと沖縄で伝統舞踊やkoto、そして沖縄の織物を学ぶことができました。沖縄の宗教と習慣も私たち家族にとって守るべき重要な習慣でした。

2) 私が大切にしているものはたくさんあります。その中に、私がいつも持ち歩いているものが2つあります。古いinkan入れの中に、とても古いomamoriと、kotoを弾くのに使うとても古いtsumeが一揃い入っています。omamoriは片面にodaimoku、もう片面に私の名前が刻まれた昔ながらのものです。私は子供の頃からこれを持っていました。この古い沖縄風のtsumeは、かつて私にkotoの演奏を初めて教えてくれた叔母の持ち物で、私が生まれる前に習い事を始めたときに叔母の先生から贈られたものです。これを使って音楽を奏で、心の表現をした人々の努力が沁み込んでいます。私たち家族にとって仏教の習慣と伝統的な宗教的習慣に従うことは重要です。ですから、omamoriはとても大切にしています。

3) 私は1950年寅年に日本の広島で生まれ、5歳の時に父方の祖父一家が移住していたハワイのオアフ島に一家揃って移住しました。私の両親は祖父の家族が当時働いていたワヒアワのバイナップル畑で働く事になりました。暑くて慣れない土地、言葉や習慣の違いなどで、両親も最初はいろいろ大変な思いがあったようですが、未だ幼かった私は日本では食べたことがなかったバイナップルの甘いつまみにすっかり魅せられて、ハワイが大好きになりました。

ワヒアワの高校を卒業するまでは、勉強の傍ら家の手伝いをし、夏休みにはホノルルの街で日本食の食堂でアルバイトをしました。その食堂の経営者が広島出身者で、私の家族から聞いていた話なども交えながら色々な事を教えてもらいました。高校を卒業してからも、あちこちの食堂やレストランで働き、家庭も持って2人の子供にも恵まれました。色々な苦労もありましたが、今は米本土に暮らす子供達の家族、特に孫達に会うのが心からの楽しみです。

4) 私の祖母がハワイに移住した時に、唯一大事な物として肌身離さず持ってきた物が楽器の琴です。祖母の遺品として母が受け継ぎましたが、残



念な事に10年前に火事で焼けてしまいました。琴の爪3個だけが今の私の手もとに残っていて、これも母から受け継いだ古い財布の中に大事にしまっており、時々取り出しては祖母や母の事を思い出しています。これまでの70年間をとにかく無事に、健康にも恵まれて幸せに過ごして来る事が出来たのも、先祖代々信仰している日蓮宗のおかげだと思います。これから先も毎日、南無妙法蓮華経を唱えながら無事に暮らしていけますように、と願っています。

### 《Julie/Bonnie》



1) 私は 1971 年にイリノイ州シカゴで生まれました。母はスペインのバスク地方の出身で、父はイタリアの出身です。ミネソタ州で育ち、大学院に通うために西のワシントン州に移りました。ここでCaseyと出会い、娘のミナが生まれました。ミナが 3 歳のとき、私たちは家売って旅をすることにしました。そしてハワイにたどり着き、2008 年以来、ここが私たちの故郷になりました。私たちはシンプルな生活を送り、自分たちの小さなビジネスを持ち、人々が丁寧に暮らし、アロハの精神を受け入れることを支援しています。

2) ナタラジャは、幻想を踏み出す宇宙的な恍惚のダンサーです。ナタラジャは、ハーバースクールに通っていた2002年に友人がプレゼントしてくれました。私はアメリカ南西部の砂漠に住んでいて、ダンス・マトリックスという小さなヨガスタジオで毎週エクスタティックダンスのクラスを教え始めました。幼い頃からダンスが大好きでした。ダンスは私が真に自由を体験できる数少ない方法の1つです。私の最も幸せな子供時代の思い出は、兄弟たちとリビングルームで踊り明かしたことです。砂漠で踊り、指導者の道を歩み始めた経験は、まるで魔法のように私を変化させてくれました。



3) 写真に写っている女性は30代から40代前半くらいでしょうか。彼女はハワイアンではありませんがハワイで生まれ育った「ロコ (local)」に見えます。自然は彼女にとって重要なものだと思います。多くの思いや悩みを抱えていそうです。彼女は人生に関わるものとしてシヴァ神を紹介することを選んでいました。ですから芸術もまた、彼女の人生の重要な部分を占めているのかもしれませんが。シヴァ神はヒンズー教の重要な象徴です。

4) 私はシヴァ神の深い意味については詳しくありません。ただ、これは踊りにかかわるシヴァ神のように見えます。シヴァは神聖な神とみなされていて、多くのものを象徴しています。彼女にとって重要な守護神です。民族的にはおそらくヒンズー教徒でも東インド人でもないでしょう。けれど、彼女はシヴァ神を守護神として崇拝しているはずで、彼女がシヴァ神の足元に捧げた香り高い一輪のジンジャーフラワーは、シヴァ神への感謝のしるしです。

### 《Utae/Julie》



1) 長年、日本以外の国に暮らし、旅を続けてきた私はハワイにたどり着きました。都会に疲れ、日本に帰ろうと考えていました。ヒロを訪れたのは1990年のことで、そのころ私はカリフォルニアのオークランドで布団作りの工房を開いていました。市場を調査をしたところ、昔から日系移民が多いヒロはビジネスを移転するのに最適な町であることが分かりました。ハワイで暮らすことはとても素晴らしい妥協案でした！ヒロに降り立った瞬間、ここが最終的に落ち着く場所だとわかりました。

私は芸術家であり、物書きでもある家族の中で育ちました。文化的には豊かでしたが、お金はありませんでした。私の両親は、物質主義的な貪欲さ、虚栄心、利己主義よりも、政治経済の変化、平等、人間性を重んじていました。それで、こうした教育は幼少期から私に植え付けられました。

ヒロはとてもユニークな国際都市です。なぜなら、大学や望遠鏡、豊かなハワイの伝統に加えて、プランテーション時代からの勤勉なアジア系移民がいるからです。人々は非常に強力的に、完全に溶け合っています。

私はこれらにとても惹かれています。そしてヒロの人々が私を受け入れ、多くの励ましを与えてくれたことにとても感謝しています。



2) 私の鉄は、この世のあらゆる痛みや苦しみを断ち切る剣です。

私の針は、あらゆる壊れた希望や夢を修復する絆です。

3) 私は1955年にオアフ島のホノルルで生まれました。両親はヒロシマの後、日本からオアフ島に移り住みました。今はハワイのヒロで、日本文化の記念品や衣類を制作販売する小さなお店を営んでいます。私には息子と娘、そして孫が一人いて、みんなオアフ島に住んでいます。オアフ島に家族で旅行し、日本文化の記念品を集めるのが趣味です。また、日本の生地を買うために毎年日本にも行っています。私は人生に満足しており、小さなお店の店主として挑戦と自由を満喫しています。

4) このブラザーのミシンは、1975年に私が自分の商売を始めたいと言ったときに両親からもらったものです。最初はオアフ島で5年間、家族のために裁縫をしていました。そして1980年に夫とハワイ島に引っ越して家庭を持ちました。家族のためにハワイ島で裁縫を続け、2人の子供が学校に通い始めると、ヒロの表通りに店を構えました。ハワイアンベッドカバーや洋服など、作るアイテムはどんどん広がっていきました。私はこのミシンが大好きです。新しいミシンを持っていても、やっぱり私のお気に入りはこのミシンで、商売を始めたばかりの時に家族がサポートしてくれたことを思い出させてくれます。



### 《Jeri/Utae》

1) 私とハワイとのつながりは、14歳の時、家族との休暇でハワイを訪れたことから始まりました。私はアメリカ本土で生まれ育ちましたが、ハワイに着いた瞬間、思春期だったにもかかわらず、深い帰属意識と故郷を感じました。8年後の1978年の夏、コロラド州ボルダーの大学で英文学の学位を取得した後、ここに引っ越しました。ヒロに来たのは、シェイクスピアの舞台をコミュニティ・シアター・グループで立ち上げるのを手伝うためでした。

ハワイは私にとって本当の故郷です。なぜならハワイが私を夫の元に導いてくれたからです。そしてここでの生活が私の人生を支え、豊かにし、私が最高の人間になるのを助けてくれるからです。

私の仕事と暮らしは、ずっと光と闇の均衡の内にあります。

私はカウンセラーであり、性的暴力や家庭内暴力の被害者を擁護していました。またホスピスや、殺人事件の後遺症に悩む家族のためにグリーフカウンセリングも行ってきました。暗い仕事ではありますが、常に冷静な頭と温かい心でいるよう心がけています。明るい面では、私はプロとして歌や演技をしていて、ナイトクラブや演劇作品に出演したり、歌を作曲したり、演劇ワークショップを開いたりしています。

牧師の免許を持っていて、100組以上の結婚式を取り仕切ってきました。私は「Singing' In The Rain!」という歌を届ける事業も営んでいて、誕生日や何かおめでたい機会におどけた衣装に身を包み、人々にセレナーデを贈るという素晴らしい機会にも恵まれてきました。

私はパフォーマンスアーティストですが、趣味としてビジュアルアートを作成することも大好きです。芸術的な能力はあまりないので、私の作品はアートフルというよりも「ハートフル」なものがほとんどです。

仕事は真剣に、自分のことはお気楽にやっています。

2) 私が選んだ持ち物は、滑らかで平らな飛び石です。私はこうした石が大好きです。父は大西洋やニューイングランドの湖で水切りを教えてくださいました。そして私はいま、火山岩でできた島の上に暮らしています。私の家族はユダヤ人で、お墓に花ではなく石を持っていく習慣があります。コロラド州にある父の眠る場所を訪れるときは、私は飛び石をひとつ持って行きます。

3) 私はドリームキャッチャーです。

三日月の夜に瓶詰めして、

三日月の都市（ヒロ）の市場で売っています。

私はイスラエルのアイン・ハロッド・キブツで生まれました。

とても平和な時間でした。

中東、イランのカジャンにいた私の先祖は、偉大な陶芸家であり、青いガラス瓶の作り手でした。

4) この石は私そのものです。

誰もここから何かを奪うことも与えることもできません。

丸く滑らかで、ただそれとしてある陽だまり。

### 《(Helen)/Jeri》

1) 本人による文章なし

2) 本人による文章なし

3) ヘレン・ミヤシロです。アメリカ国旗と日本語が書かれたのぼりの間を歩いているところです。私は 74 歳の女性です。私は日本とアメリカの両方の文化によって形作られてきたので、この写真は私の混ざり合った人生の側面を表すのにふさわしいものです。

母は白人、ハワイでいうところのハオレでした。父は日本人です。私はヒロで生まれました。ワイアヌエエからレインボー・ドライブに入ったところにある、いわゆる「古い、古い病院」です。両親は私をボクラニ通りにある赤い屋根の白い家に連れて帰り、いまでもそこに暮らしています。私はひとりっ子で、父と母が亡くなったときに家を継ぎました。今でも毎日、ヒノデのご飯を炊いていますが、母が使っていたものよりも洒落た炊飯器を使っています。





4) 私は撮影する私物としてスクラップブックを選びました。1972年に私が日本を訪れたときの写真や思い出の品が収められています。女友達と一緒に旅行に行き、色々な県を訪れるツアーに参加しました。私の先祖が住んでいた町や都市を訪れ、神社を見て、美しい宿に宿泊し、共同浴場に行くときには浴衣——素敵な日本のローブを着せてもらいました。1972年当時は、旅行中の写真を見るために、フィルムの現像が終わるまで1週間以上も待たなければなりませんでした。若い人たちが皆しているように、携帯電話ですぐに「自撮り」ができるような時代ではなかったのです。

### 《Ann》

- 1) 本人による文章なし
- 2) 本人による文章なし
- 3) (Annが左の人物の写真を見て創作した話の書き起こし)

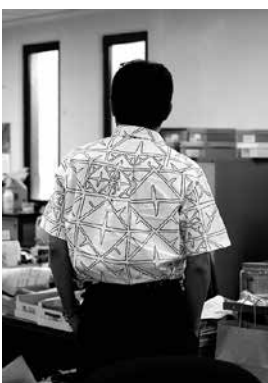
母ヘレンの最初の夫ジョージは、1941年の今日、この場所で短い生涯を終えました。結婚してまだ間もない頃です。戦後しばらくして母は再婚し、双子の娘を産みました。姉のマーガレットと私です。

母は当時のことを私たちに話すことはほとんどありませんでした。秘密にしようとしていたわけではありません。ただ、ジョージのことも私たち家族のことも同じだけ愛していたからです。けれども、そういった複雑な感情を理解するには私たちはまだ幼すぎました。それで私たちが母に話を聞こうとはしませんでした。過去を知ることと過去に囚われることが同じだと思っていたのです。

ジョージと私たちの生はコインの表裏です。普段は忘れていますが、ふと思いついて後ろめたさのようなものを感じる日もあります。けれど母は、たとえ誰と結婚していたとしても私たち姉妹を産んでいるはずだと言ってくれました。可笑しくて父には少し気の毒な話ですが、私もそう信じています。

- 4) (Annが左の写真を見て創作した話の書き起こし)

帰りに売店に寄ってください。撮影してもらいたいのがあります。人は現在を生きています。過去は変わりませんが、けれど遠くなります。ここに限った話ではありません。どこでも同じです。さっき小さな女の子が母親にそのぬいぐるみをねだっていました。彼女が大きくなる頃には、きっとここにもローラーコースターや観覧車が建っていることでしょう。



### 《Taro/Ann》

1) 私が初めてハワイに来たのは18歳の時、大学のゴルフ部の遠征で来ました。最初にハワイに降り立った時になって素晴らしい場所なのだと思います、それ以来ハワイが大好きになり、何度となくハワイを訪れ、ついに5年前に移住しました。今は日本語新聞の会社に働いています。ハワイの日系人の歴史を日本人に伝えることと、ハワイと日本の架け橋になるようなことができればいいなと思っています。

2) この時計は50年前に祖父から父が結婚したときにもらった時計を、私が就職した際に譲り受けたものです。祖父から父へ、そして私へと3代受け継がれた時計であり、いろんな思いが込められている時計です。この時計は大事に日にしか着けません。祖父、父から力を借りたいとき、自分自身に気合を入れたいとき、に着けています。将来は私の息子に譲り渡し、4代目として引き継いでもらいたいと思っています。



3) (Annが左の写真を見て創作した話の書き起こし)

私の名前はタロウです。妻と息子、それから二匹のジャーマンシェパードと一緒にカハラに暮らしています。日系アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれました。15歳の時に父の仕事の関係で日本に移住し、日本の大学を卒業した後にハワイに戻ってきました。若い頃は飲食や観光、服飾、輸入業などいろいろな仕事を転々としていました。現在は広告関連の会社を経営していて、ダウントウンにオフィスを構えています。地元や日本の会社と多くの企画を手がけるなかで、ハワイと日本の関係について考えることが多くなりました。今では週に一度、モイリイリの資料館で日系人のルーツを調べるボランティアをしています。

4) この時計は祖父の形見で、新聞は祖父が亡くなった翌日にハワイで発行されたものです。どちらも私がハワイに戻る前日に父から譲り受けました。この時計をつけていると父が傍にいるようで、孤独を感じることはありませんでした。一緒に暮らしている頃は、それほど良い関係ではなかったのに不思議なものです。新聞をくれた理由は結局聞けないままになりました。本当のところは私にはわかりませんが、父も忘れてしまっていたのかも知れません。

## PortLait/Filler

正誤表 (日本語版)

発行日 | 2023年12月16日

著 者 | 三田健志

発 行 | 五島記念文化賞 美術新人賞 研修帰国記念

三田健志個展「忘れていい風景」企画室

info@exhibition.takeshimita.com

協 力 | ハワイ大学マノア校 美術・美術史学部 (株)ハワイ報知社

助 成 | 公益財団法人 東急財団

© 2023 Takeshi Mita